

イランの記録映画

# 『18パーセント』(2018年制作)

監督:モスタファー・シャバーン 制作: DEFC

2022年12月18日(日)



■サルダシュト  
ヒロシマ通り

トルコ

■ガルエチー村  
イラン兵の拠点地

■ハラブジャの悲劇  
イラク サダムフセインによるクルド族化学兵器攻撃



■デズリー村

コルDESTAーン州、国境に位置する町。クルド族が住む村でイラクのハラブジャと隣り合わせとなっている。  
※コルDESTAーン…「クルディスタン」のペルシヤ語読み



■1988年4月3日

成田空港にイランイラク戦争でイラク側の化学兵器使用により負傷した5名のイラン人を乗せた飛行機が到着、その後空港から10分ほどの成田赤十字病院に搬送。



これに先立ちイラン政府および国会は、イランに対するイラクの化学兵器使用を激しく非難するとともに負傷者の治療に全力を尽くすと発表。

※写真中央 竹下 登首相(当時)

11日後、5人中3人の容態はイランに戻る事が出来るほど良くなる。



もう2人の容態は深刻なまま、帝京大学病院へ搬送される。そのうちの一人、アリー・ジャラーリー…彼にとって新しい人生の幕開けとなる。

■1988年3月16日

サダムフセインは、イラン側が行ったある作戦とそれによる敗北について、それをくつがえすため、イラクのハラブジャに住むクルド人とイランが協力したと主張、その罪で化学兵器によるハラブジャ空襲を行う。その日だけで5,000人ものが亡くなる（ハラブジャの悲劇）



イラン兵はハラブジャからそう遠くないところにおいて、民間人を助けるためすぐ駆け付けた。ある作戦のために兵士が所持していたカメラは世界の戦争の歴史の中でも信じられないほどの光景を収めていた（一部 映画で放映）



#### ■イラン兵の拠点地、ガルエチー村

「爆弾の一つが落ち地面に当たるとそこから白い煙が出ました。最初はこれらの爆弾は壊れているのか不発なのか、そう思っていました。まさか化学兵器だったとは思ってはおらず、空襲が終わった後いつもとは違うことに気付きました」

「全員直ちに撤退せよ！風上に撤退せよ！」（当時の記録動画）



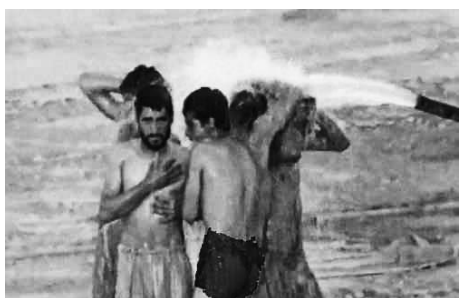
#### ■サルヴァーバード村『オスマーン庭園』（化学兵器負傷者の仮治療所）

化学兵器攻撃でたくさんの兵が亡くなり、数少ない生き残り兵はここに運ばれた。



#### ■アミーネさんとカーク・サーレ・アバーディ（ラスーロツラ一部隊長（当時））との会話

「外を見るとアフマダーバードとガルエチーから煙が上がっていたわ。」「人々をガルエチーから連れてきてこの庭に寝かせてそこで服とブーツを脱がせて全部集めて穴に捨てたわ。なぜそんなことをするのかと聞くと、燃やすためだと言われたわ」



#### ■負傷者の体を洗い流す

幸いなことに『オスマーン庭園』近くにサルダーバード川があり、そこで体に付着した毒ガスを素早く洗い流すことに…



#### ■ 1988年3月半ば

ファアテム・ジャラリー（アリーの妹）

お正月(ノウルーズ)が近かった頃で住民はみんな大掃除に忙しくしていた。ちょうどその日のお昼ごろ電話で兄が負傷してテヘランのイマームホセイニ病院に搬送されたと連絡が入った。

その後、財団から、負傷者たちがイランに残れば容態が悪化するかもしれない、数名をドイツへ搬送すると告げられる。しかし、70%以上の火傷と18%しか正常に働かない肺のアリーを搬送しても意味がないとのことで戻された。彼の母はそのことに納得できず息子を海外へ連れて行ってと…



その後、アリーを含む化学兵器被害者5名を日本に搬送することに…そしてメフラバード空港へ向かう。

#### ■ ハミード・バフマン医師

実を言うと、アリーさんについては何の望みもない形で日本へ搬送した。彼の家族のために…そして、他の人々にもイラン政府は戦傷者を見捨てたりしないと示すために…

#### ■ 2004年3月

イランが核技術を手に入れる1年前に、世界各地でその事に恐れを抱いていた。日本のNPO法人「MOCT」はテヘランに向かい日本の核兵器によるつらい思いをイランの首脳たちに伝えた。



#### ■ ハミード・サーレヒー医師

私たちはすでに犠牲者だと言った。イランには10万人以上の化学兵器負傷者がいると…

その事実は「MOCT」理事長の津谷さん、同伴者たちにとって驚きだった。



#### ■ サルダシュトへ

そこで、化学兵器被害者の存在を知る。化学兵器(毒ガス兵器)の被害にあった自分たちのことを世界中の人たちに知ってもらいたいとのこと…

※サルダシュトの通りを核兵器被害者のため「ヒロシマ」と名付けた式典  
※サダムフセインは、ハラブジャ攻撃の前の1987年6月、イラン西部のサルダシュトに対して化学爆弾を投下(ParsTodayより)



#### ■ 2004年8月 広島

イラン化学兵器負傷者がMOCTの招待により広島慰霊祭に初の参加。皆、不思議な感じで参加しているイラン人のことを見ていた。イラン国民への化学兵器攻撃の事実を知る人はほとんどいなかった。

## ■2005年8月

サーレヒー医師にはある考えが浮かび、津谷さんにある提案をする。翌年、イラン人グループにある人が加わった。それはアリー・ジャラーリー、17年ぶりの来日となる。今日まで彼が生き残っているとは誰も思ってもいなかった。彼はもう一度日本に行くのが夢だったとのこと、そして、滞在半ばにアリーはあるお願いをした。それは、以前お世話になった中谷医師に会いたいと…



## ■中谷壽男医師(左)とアリー・ジャラーリー(右)17年ぶりの再会

当時アリーはイランへ再搬送され回復できた。それから一年後に自分の好きな仕事、軍養成所で育成教官として働き始めていた。しかし、中谷医師との再会はアリーの人生を変えた。



## ■2017年11月

化学兵器禁止機関(OPCW)第22回締約国会議  
オランダ

アリーは育成教官を退職後、国際平和大使となる。世界中の人々に自身の体の傷を見せることで化学兵器使用の恐ろしさを知らしめることにしたのだ。



## ■2018年冬

テヘラン ラubberフィーネジャード病院

映画のエンディング…主人公が苦しみながら手術を受けるシーン。終わりが無いのが化学兵器の恐ろしさと考えさせられるラストシーン…

## ■エンディングロールより

国際連合大量破壊兵器廃棄特別委員会 UNSCOM の2003年レポート

イラン・イラク戦争中に約100万人ものイラン人兵士・民間人を問わず化学兵器毒ガスに被爆しました。そのうち10万人以上がそれ以前の攻撃を受けていた負傷者でした。

化学兵器の負傷は、一時的な救命治療があるだけで完全な治療法はありません。

毒ガスでの苦痛は一生消えません。そして彼らは国際的に存在を無視されたままこの世を去ってゆくのです。

字幕：イラン大使館文化参事室（イラン文化センター）

※ハラブジャ =ハラブチェ（ペルシャ語読み）

※クルド =コルド（ペルシャ語読み）

※資料 映画の字幕を参考にしました